



ステップフリー搭乗スロープ



共同開発した車いす

の機内でも取り回ししやすい車いすをメーカーと共同開発したほか、横になった姿勢のまま搭乗できるストレッチャーをATR機で初めて導入。離島にとって不可欠な医療輸送への貢献や、高齢化が進む地域のお客さまの利便性向上にも努めています。

実はこのATR機は、2016年2月に、天草エアライン(AMX)が

2017年1月26日、JAC待望の新型機、ATR42-600型機(以下ATR機)の初号機が快晴の空のもと、鹿児島空港に降り立ちました。今後の鹿児島県内の離島を中心としたJALグループの地方路線を担う翼は、ターボプロップ機(ジェット機同様のタービンジェットエンジンでプロペラを回して推進力を得る飛行機)最大の客室幅を誇り、快適性が一段と増



地域とともに

しています。燃費性能も約20%向上させ、騒音も少ないなど、今までのプロペラ機概念を大きく変える最新鋭の旅客機です。

**地元デザイン学校との
コラボレーションが実現**

特別塗装が施された初号機と二号機の機体には、JACが就航する鹿児島

最新鋭のプロペラ旅客機が つなぐ 鹿児島島の離島と地域の絆

日本エアコミューター(JAC)

島県内の離島・地域の象徴であるハイビスカスが描かれています。機体左側面の大きなハイビスカスを鹿児島に見立て、その左下に連なる7つは空港がある鹿児島島の7つの離島を表現。機体右側面のハイビスカスはJACがつなぐそのほかの地域を表します。ハイビスカスを結ぶ5本のラインには、水引のように地域と地域、人と人をつなぎ、子どもの夢、人々の想い、過去から現在と未来をつなぎたいという想いを込めました。5本のラインの配色は、奄美大島にのみ生息する鳥・ルリカケスの赤、黒、瑠璃色を基調としています。

なお、機体のデザインは、鹿児島で唯一のデザイン系総合専門学校であるタラデザイン専門学校と共同で制作したものです。同校はJACの本社がある鹿児島で産学連携のデザイン制作に

熱心に取り組んでいることから、今回のコラボレーションが実現しました。

地域医療と密接にかかわる「命の翼」について

JACはATR機導入に合わせ、小型機における搭乗時の段差解消を目的に、英国のAVIRAMP社製のステップフリー搭乗スロープを導入しました。日本よりバリアフリーが進んでいる欧州では、設備の普及を進めるためにも、できるだけ安価な材料でシンプルな構造に設計することで、地域で持続的に運用しやすいようになっています。JACは今後、この搭乗スロープを各就航地に導入し、大型機同様にステップフリーの搭乗ができるよう改善していく予定です。

日本で初めて導入しました。AMXが以前保有していたボンバルディアDHCR8-100型機からATR機への機材更新にあたっては、JACとAMXで計画の早期段階から協議を重ね、約6カ月にわたる更新期間の運休を極小化するために取り組んできました。

AMXでは、地域医療を支える都市部の医師を離島へ運ぶ「命の翼」として、年間延べ560回のフライトを提供しています。しかし保有機材が1機のAMXには、機材更新のため一時的に発生する膨大な実務や訓練に対応できる人員の余力がなく、単独で機材更新を行うには、その間定期便を運休させる必要があります。そこで、実務と定期便維持に必要な運航乗務員・整備士の不足分をJACからAMXへの出向によって補充。路線・便数の縮小はありましたが、これにより「命の翼」を維持しながら機材更新を実現したのであります。

グループを超えた共通事業機で地域の生活を支えたい

現在AMXとJACは、グループの垣根を越えた地域航空の取り組みの次のステップとして、共通事業機登録

と整備業務の受委託を目指して協業を進めています。共通事業機とは、複数の航空会社が一つの機材を共有できる制度のこと。既にJALグループ内での共通事業機の運用は、2015年11月からJACの保有機と同型機を運航する北海道エアシステム(HAC)との間で始まっています。制度導入以後、HACの2機の重整備期間中にJACの機材が貸し出され、延べ450便、約9900人のお客さまの利便が確保されました。また昨年、北海道の荒天で地上交通網が寸断された際には、HACは陸路の代替として期間増便を設定し、共通事業機を活用して延べ114便、約2500名のお客さまにご利用いただきました。

共通事業機登録は、限られた資産と人員で地域の生活を支える地域航空会社にとって、効果の高い施策です。JACとAMXは、実情として大手系列のグループ内では実施されていない本施策を、グループを超えた地域航空会社間の協業として早期に実現するための検討を重ねています。